



アーティストインタビュー

DNA に参加するアーティストたちが、
何を思い、表現しようとしているのか。
それぞれの中にある、
個人と社会への眼差し。
今、ここから発する声を聞きました。



「過去をどう参照して未来に繋げるか。ダンスはその方法の一つ」

実の父の人生と、私の人生。アーティスト、ハラサオリの個人的な事象が、東京オリンピックという社会的な事象と重なる。

「今回の再演は、奇遇にも私と父の年齢の差である『57年』ぶりの東京オリンピック開催の年と重なりました。父は前回の1964年東京オリンピック当時33歳。私も今年33歳になります。その事実だけを並べれば、私的な偶然に過ぎないのですが、この『Da Dad Dada』(ダダッドダダ)という作品は、ある個人の人生を糸口として社会の歴史へアクセスするような構造を意識して制作しました。私にとっての表現とは、私的な記憶や事象を通して世界を批評的に見つめる、その体験を共有するための作業です。いつもそういう未来を目指して踊っています」

再演を前にパンデミックが顕在化し、アーティストとして、ダンスは役に立つのかという問いに改めて直面した。「生死には関われない=役に立たない。それでもやりたいと思ってしまう、エゴとの向き合い方。ダンスは、役に立たない。けれど改めて、役に立たないものを排除しない社会というのを実現しなければいけないと強く感じました。“役に立たないもの”を包括する豊かさ、それを体現していくことがアーティストの使命のひとつだと思っています」

拠点にしているドイツのベルリンでは、行政が「文化は必要不可欠である」と明言をした。「社会の無駄」を認める体力がある国。

「私は、ダンスへの興味を失い、何年も踊っていない時期がありました。その頃留学した先のドイツでは、毎晩のように舞台が上演されていて、その世界に圧倒されました。そこには、ダンスはもちろん、美術、音楽、ファッション、建築、思想哲学、医学、テクノロジーなど、様々なバックグラウンドと共に身体表現を追求しているアーティストがいました。ダンスである、演劇であるといった単純なジャンルの線引きを超えた、多層的な批評性と創造性に衝撃を受けて、私は再び自らの踊りと向き合う希望を持ってました。裏道を歩いた私だから、20歳の頃の自分のような、これからの人たちのために、少しでも還元したいと思います。自分にとってのローカルである東京で」

ハラにとって踊ることは、社会にコミットする唯一の方法。

「どこかで、人の人生に関われば、といつも思っている気がします。私の作品を観て何かがすぐ変わる、とかでなくても、その体験を通して一度過去に飛んで、また戻って、さあ明日からどう生きようかと思いを馳せる、とか」

今、この瞬間の感動だけを求めない。それはダンサーとしてはそう多くない思想かもし

ハラ サオリ

れませんね、と微笑む。

「もっと長期的なことをしたい。時代が自分を通過していく。私は長い時の中のOne of Them。自分を、自分の人生を、本当に小さな存在としか思っていないのです。過去をどう参照して未来に繋げるか。ダンスはその方法の一つです」



Saori Hala

ダンサー、振付家、美術家。ドイツと日本を拠点に、空間と身体、身体の帰属をテーマとした作品を制作する。バックグラウンドであるデザインや生態心理学を応用した独自の創作スタイルが評価され、国内外でその活動の幅を広げている。近年の共演、出演、振付に大谷能生、角銅真実、原田知世、蓮沼執太、U-zhaan、NIKE、BLESS、資生堂、shu uemura、カルティエなど。

『Da Dad Dada』(2017)

日時：10/30(土) 18:00、10/31(日) 15:00
会場：草月ホール



「分断されることで、隣同士なんだ、くっついているんだという逆の意識が働く」

川口 隆夫、ふくだペロ

INOUTSIDE は、「ウイルスがヒントをくれる未来」をテーマの軸に据える。

川口「ウイルスは、色々なものにくっついて宿主の中に入り込み、複製され、増殖していく。それが宿主を壊していくということではあるのですが、色々なものに適応していくオープンさ、様々な状況に入り込み自分を展開していく、という側面は、興味深くもあること」

このプロジェクトでは、作り込んだ作品を舞台上で提示するのではなく、アーティストやパフォーマー、研究者などジャンルを超えて呼び込み、フレキシブルに様々なプログラムを動かす。川口「パフォーマンス、トーク、ワークショップや展示など、建物の”体”のいろんな部位で、色々なことが起きていく。全館まるごとの2日間、可能であればお客さんもずっといて、出たり入ったりしながら、いろんなことを見たり聞いたり話したりできるなら、それってすごく、ウイルス的」ふくだ「ロックダウンやソーシャルディスタンスで、単純に、人というものが難しくなっている中、ウイルスについて話す、考える。それができる場所を作りたい、というの、そもそも思いとしてはあります」

このプロジェクトの始まりは、2017年。最初は、HIVにフォーカスしていた。

川口「HIV / エイズの世界的な感染が始まってからおよそ40年経っていますけどやはり今でも厳しいものがある。僕らはそれをどのようにしたら

乗り越えられるか。ポジティブな、身近なこととして考えられるか。それが出発点でした」

そこに、コロナウイルスによるパンデミックが世界的に起きた。世界の反応は、HIVの時のそれとは全く違うものの、「分断」が顕著になるという共通項があった。むしろコロナウイルスでは、アクリル板など、隔離が分断を強調する。

川口「ただ、分断は、分断されたこちら側と向こう側をぐっと引き寄せ、実は接しているような意識を生む。普段は隣の人を意識すらしなかったのに、分断されることで一種の緊張感が生まれると同時に、隣同士なんだ、くっついているんだという逆の意識が働く、ということもあるかな、と思う。それは、つながり、ということでもある」

一見、分断と見えるものが、実はつながっている、ということ。

ふくだ「これは、地域や個人の違いでも同じ。東京、京都、パリや他の違う街でこのプロジェクトを行う。それぞれローカルのアーティストを呼び込むことによって、ウイルスに対する異なった見方を引き出していく。そうすることで初めて、むしろ共通するものが見えてくると思います。今、パンデミックが世界的な状況になっているこの時に、ひとつひとつ、そうした作業を細かく積み上げていく必要があるのかな、と思います。通常、アートは、答えを出すものではないですけど、通常以上に、答えを出すスタンスを避けて」INOUTSIDE。隙間なく並べられた文字。INとOUT

の境界線は見えなくなって、そこに接点はあるのか。私たちはどこにいくなのか。問いかけられているようだ。



Takao Kawaguchi

1996年から「ダムタイプ」に参加。2000年以降はソロを中心に、舞台パフォーマンスの幅広い可能性を探索。2013年、『大野一雄について』(2013)を発表。16年秋の公演でニューヨーク・ベッシー賞にノミネートされ、現在も世界各地をツアーしている。

fukudapero

マルチモーダル人類学者、詩人。立命館大学先端総合学術研究科博士課程在籍。イギリス、ルワンダ、日本をフィールドとして、現実と過去（未来）の創造を主要テーマに論文、像、詩、写真、小説、スケッチといったメディアを複合的に用いて制作に従事する。

『INOUTSIDE』(2021)

日時：10/23(土)、10/24(日)

会場：SHIBAURA HOUSE



「すべての人が、生きるように、実は踊っているのではないだろうか」

木野 彩子

5年前から鳥取を拠点に、大学講師としても活動する木野彩子。Dance New Airでは、2018年にレクチャーとダンスパフォーマンスを融合した「レクチャーパフォーマンス」の形で『ダンス八體育ナリ?』を発表してきた。義務教育の中で、ダンスが体育のカリキュラムに組み込まれてきた経緯から、社会の中のダンス、そして身体を捉え直す作品だ。

第三弾となる今回は「未来の身体」を見つめる。身体＝シintai＝進退。身体を通して、未来へどう向かうのか、木野の投げかけが放たれる。会場は「港区立みなと科学館」のプラネタリウム。「ダンスが舞台芸術としてだけでなく、もっと、街の中、普段の生活の中に浸透していくといいのではないか」という思いから、劇場を飛び出した。場所に惹かれて来ちゃった、というきっかけで来ていただくのもいい、と木野は言う。

そこには、ダンスは本来、鑑賞するだけのものではない、誰もが自由にのびのびと、表現するものだったのでは、という木野の思いがある。

「学校で体験するダンスは、集団で行う、型の決められた、どちらかというスポーツ寄りの感性です。型がある表現を否定はしません。が、いろんな表現の仕方があっていいし、い

ろんなダンスがあっていい。いろんなタイプの人がいればいるほど、多分、豊かで面白い」

だからこそ、現代のデジタル社会の中で、身体表現が自由になるどころか、人々が自身の身体に疎くなり、身体の動かし方や欲求に気づけなくなる傾向には危機感を抱く。

英仏での生活を経て、12年前に日本に戻って以来、その変化を強く感じている。さらにコロナ禍では直接会えず、画面越し。「身体から発する、ニュアンスや小さな表現を相互に交換することが豊か」なのに、それが遮断されてしまう。身体が発するもの。これは、公演を通じて投げかけたいことの大きな柱の一つだ。

「最近、私の中で、生きるということと、踊るということが近くにあります。以前は、身体表現として見え方を気にしていたけれど、問題は、手の角度とか、そういうことではなかった。結局、その人の生き方や今までの経験が滲み出るといことがわかってきました。生きることがそのまま舞台上に上がっていく行為だ、と」

続けて「本質的には、すべての人が、生きるように、実は踊っているのではないだろうか」と話す木野の言葉は、私たちに「こっちへおいでよ」と誘い出すような力強さがある。

「生きるの”いき”は、呼吸の”息（いき）”でもありますよね。吸って吐いて、それが、踊りも含めた全ての動きの始まり。そこまで戻していけると、おそらくダンスというものが、多くの人にとって、もっと普遍的な価値を持っていくのではないかと思います」



Saiko Kino

ピンクレディのUFOに憧れダンスをはじめ、中高保健体育教員になるも、球技も跳び箱もできず、断念。ダンサーとして英仏で活動後、2016年鳥取大地域学部附属芸術文化センター常勤講師として着任。体育と芸術の狭間にいる当事者としてこのシリーズを作り続けている。

レクチャーパフォーマンス『ダンス八體育ナリ?』
其ノ三 2021年踊ル?宇宙ノ旅 (2021)
日時: 11/5 (金) 18:30、11/6 (土) 18:30
会場: 港区立みなと科学館



「色々な感情を、一度に扱いたい」 武本 拓也

毎日必ず上演することを日課としている武本拓也。上演は、日々行うことの延長線上にあり、日常の一部である。

現在は、日中は企業に勤め、主に夜、必ず「本番」をする。誰も見ていない公民館の一室で、それが叶わなければ自宅や公園で。気づくことがあればメモに残し、深め、進む。例えば「指先の脱力を全身でもやる」「身体の前面を使う」といった言葉がノートに並ぶ。

「毎日やる意味は、上演を、特別な存在ではなく、手元の日常に引き寄せるためです」

武本の上演は、舞台上にただ一人、立つ、歩く、など連続するわずかな動きの積み重ねで成り立つ。一見すると静寂、無、孤独のように見えながら、「まずはその場にある音に、できるだけ細かく耳を澄ましていきたい」と武本は言う。決まった振付や動作を見せるのではなく、その場とつながり、関係していく。「お客さん、照明や音響、美術、全ての参加者が上演を構成する。僕は上演に参加している、という意識でいます」

武本には「相反する感情を扱いたい」という思いもある。

「泣きながら笑う、とか、惨めだけどエレガント、とか。そもそも、舞台上で一人立っている姿は、馬鹿みたいでもあるし、切実なようで

もある。かっこ悪いし笑っちゃう。一人を大勢で見つめる構図が暴力的でもあるし、楽しくもある。色々な感情を、一度に扱いたいと思う」

今回の会場となるゲーテ・インスティトゥート東京は、武本にとって今までで一番広い。その広さを思った時、武本の中に、上演芸術への動機とも近い原風景があった。

「生まれ故郷の群馬は山に囲まれた盆地です。家が榛名山の麓にあって、屋上からは赤城山を一望できるロケーション。何十キロと離れた間には障害物がなく、遠く麓の街に人や車が点々と動いているのが見える。自分は山を見ているけど、(目に映る)一つひとつの中には生き物も汚いものもあって、それぞれは同じ空気につながっているけど、別に関係していない。その体感が、昔から心に残っています」

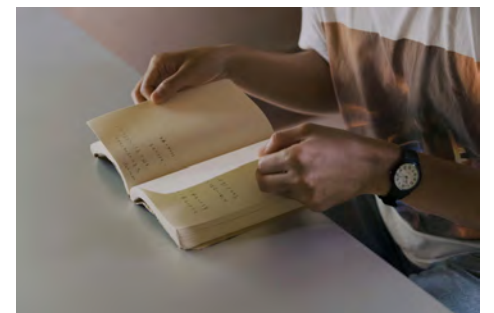
上京して舞台を見るようになって、同じことが言えると思った、と武本は言う。

「客席と舞台は、別の世界なのに、同じ場所、同じ空気の中に自分もいる。いい舞台だと、そこで終わらず、外までも想像させる広がりがある。それは昔、自分が見ていた風景とすごく同じことだ。そこに感動して、僕は舞台をやっています」

舞台上立つ動機としての原風景を題材にす

ることは、これまで体感の内側を表現してきた武本にとっては新しいこと。

「今回初めて、体感する外側の何かを見に行こうとしている。僕自身が何かをするより、僕とお客さんとで共有できる何かを見たい、という気持ちがあります」



Takuya Takemoto

「いる」という事への関心のもと、立つ/歩く/見るなどの最小限の動作のみで、2017年より観客の有無に関わらず上演に取り組んでいる。『正午に透きとおる』(2019)『象を撫でる』(2018)など自作のソロ公演のほか、俳優・ダンサーとしても活動。武蔵野美術大学 映像学科卒業。美学校 実作講座「演劇 似て非なるもの」修了。

『山を見にきた』(2021)

日時：10/26 (火) 19:00、10/27 (水) 19:00

会場：ゲーテ・インスティトゥート東京



「何かを変えるために、願うために、目的を持って体を動かすという、技術ではなく、行為」 橋本 ロマンズ

ダンスショウケースは、今を疾走する若手アーティスト4組の作品をぎゅっと詰め込んだプログラム。自ら出演アーティストの一人ともなる橋本ロマンスが、他の3組とのセットアップをキュレーションした。セレクトの軸は「未来への意思表示」。橋本自身がまだ見たことがない、誰にとっても新しい一歩となる地点へ。未知数ながら新しいことを共有できると確信する強さのあるアーティストに声をかけた。

「既存のカテゴリーや枠の中でやるのではなく、自分だけのスタイルを確立しようとしている人たち。純度の高い者同士、でもそれぞれ性質が違う……例えば土星、木星、火星、水星、というように、単体でも完結する強い存在が集まってできることをしたかった」と橋本は言う。

橋本自身の作品は、ファッション性の高いビジュアルと音を持ちながら、コンセプトの芯が硬い。その両輪が、見るものの目を惹きつけて、奥へと引き込む。

「踊るという行為をした後に、世界が自分にとって変わっていないと意味がないと思っています。私が踊りと呼びたいのは、呪術的なこと。祈りであり呪いであり、何かを変えるために、願うために、目的を持って体を動か

すという、技術ではなく、行為」

公演は儀式。観客は、目撃者というほうがふさわしいという。

「お客様にきれいに包んでお渡しするところまでが作品」というような安全なものは作りたくない。ここで起こることは、観客がいてもいなくても、変わらない。観客の存在は、そこに事件の目撃者がいたかどうか、というような感覚です。作品の中で起きていることと現実の世界は、切り離されたものとして考えられがちだと思うのですが、あくまで地続きであるということがとても重要で、見ている人にも責任が生じる。ある意味では共犯的な関係です。見たものに対してNOと言うかYESと言うのか。どこかで自分にも関係していると思ってほしい、他人事だと思わないでほしい、という気持ちを持っています」

今作では、きっと社会の構造や、東京という都市の今の姿を意識してつくることになる、と橋本は言う。

「オリンピックが開催されて、10月には衆院選もある。そういうムードの中で、一体私たちの責任の所在はどこにあるのか。それがどう未来に向かっていくのか、ということの意思表示になるかな、と思っています。

怒っています、すごく。ずっと怒っています。

そして、私たちがアーティストである前に、社会の一員である、と言う責任について、すごく考えています。表現と責任はほとんど同じであると自覚しないといけない。危機感をもって、自分の責任を見つめています」

表現には責任が伴う、と語る姿勢が凛として美しい。



Roma Hashimoto

1995年生まれ。東京都出身。コンセプチュアルな手法を用いながらも、ポップ/ストリートカルチャーの要素を取り込むことでアートファン以外にも訴える魅力を持つ同時代性の高いパフォーマンスを制作する。SICF20 PLAY 部門グランプリ (2019)、横浜ダンスコレクション 2020 最優秀賞新人振付家賞 (2020) など。

ダンスショウケース

日時：10月30日(土) 15:00/18:30

会場：スパイラルホール